

エルンスト・ユンガーと アルフレート・クビーンの交流について¹

糸 瀬 龍*

1. はじめに

本稿は、画家アルフレート・クビーン (Alfred Kubin, 1877-1959) とエルンスト・ユンガー (Ernst Jünger, 1895-1997) との接触、および、両者の交流の過程を考察する。1929年頃のユンガーは、ナショナリスティックな評論で名を馳せ、首都ベルリンにて文筆家として売り出そうとしていた。この頃ユンガーは、クビーンとの交際をスタートさせる。そしてこの時期を境に、ユンガーの作風には変化が見られるようになる。本稿において、その舞台裏を垣間見ることができればと考える。

2. ユンガーと画家たち、そしてクビーン

エルンスト・ユンガーは、生涯にわたって、学者や思想家、芸術家ら他ジャンルの文人との交際を絶やすことがなかった作家である。そのなかでも目立つのは、絵画芸術家との交流である。それらのうち、目に付くだけでも、1920年代後半から30年代初頭（正確には、ユンガーがベルリンの居を構えた1927年7月から、ナチスの政権獲得後、ユンガーが首都ベルリンを離れ小都市ゴスラルに移り住む33年12月まで）にかけての、ユンガーが

*専修大学法学部兼任講師

ナショナリスト青年の「精神的指導者」²として、わずか7年足らずのその短いベルリン生活を送っていた頃から深い交際を重ねたドルフ・シュリヒター (Rudolf Schlichter, 1890-1955) をまず挙げることができよう。新即物主義 (Neue Sachlichkeit) の画家と目されるシュリヒターは、現在残されているユンガーのポートレートのうち最も有名な一枚を描いた人物である。また、こちらもユンガーの肖像画 (あるいは、ユンガーが弟のフリードリヒ・ゲオルクとチェスに興じる様子を描いた作品) が知られる表現主義の画家パウル・ヴェーバー (Paul Weber, 1893-1980) の名もこれに連ねられるべきであろう。さらに国を変えれば、ユンガーが第二次世界大戦中に、参謀本部付きの将校として駐屯していたパリでの、ピカソやジョルジュ・ブラックといったフランスの画家たちとの交際も注目に値する。ユンガーの文章には音楽家が登場することはあまりないのに比べて、画家や絵画作品についてのエピソードや考察は豊富に含まれる。このことは、ユンガーの、画家および絵画作品への傾倒を示すところであろう。すでに幼少期より天体観測のための望遠鏡と、薬剤師であった父の影響もあって顕微鏡を愛し、昆虫採集の大家としても知られる「眼の人」³ ユンガーの特性に関係するとも考えられるであろう。

ユンガーが交流をもった画家のなかでも、彼がもっとも大きな影響を受けた画家の一人であるといえるのが、旧オーストリア・ハンガリー二重帝国領、ボヘミアの小都市ライトメリッツ (現・リュトメリツィア) 出身のアルフレート・クビーンである。ただし、ユンガーと交際をもった画家の筆頭に名前を挙げたシュリヒターは1890年生まれでユンガーより5歳年長、もう一人のパウル・ヴェーバーは1893年生まれで95年生まれのユンガーとはわずか2歳ちがいでほぼ同年である。それに対して、77年生まれのクビーンとユンガーはほぼ20歳近い年齢差があり、親子ほどとはいかずとも、ほぼそういつてよいほどの世代の開きがあるだろう。しかしユンガーはこのクビーンと、その歳の差を超えて、長期にわたる交流を続けた。クビー

ンはサルツブルクでの修養時代、さらにはその後のミュンヘン時代を経て、1906年から、ドイツとオーストリアの国境にほど近いドイツの町パッサウからイン河を挟んだ対岸にあるオーストリアの小村ツヴィクレットに移り住んだ。二人が直接顔を合わせたのは、1937年秋、ユンガーがツヴィクレットのクビーンの元を訪れた際のただ一度切りである。

ユンガーがクビーンの作品全体をどのように捉えていたかを示す格好の文章として、以下を引用することができようか。ホルスト・ランゲの作品『鬼火（Das Irrlicht）』に言及する際ユンガーは、「東方の没落」を描き出した芸術家の一員に、クビーンの名を加えた。

彼〔『鬼火』の作者であるホルスト・ランゲ——引用者注〕は、東方の作家たちが構成する不吉なブーケの一員に数えられてよい。このブーケはやがて一つの流派として見られることになるだろうが、私の念頭にあるのは、バルラハ、クビーン、トラークル、カフカ、その他の者たちである。ここに挙げた東方の書き手たちは、没落を描くことに関して、西方の書き手よりも深い。彼らは、没落の外見的な現象を超えて、根源的な連関の中へ、黙示録的な幻想にまで突き進むのである。⁴

「没落」が、上の引用でユンガーによって名前を挙げられた作家の対象となるのであるが、彼らの筆は、その没落の表層ではなく、もっと根源的な深層にまで届くのだとユンガーはいう。これら「東方の没落」を描いた作家たちとしてここで具体的にユンガーが名前を挙げた、トラークル、クビーン、カフカ、ランゲのうち、とくにクビーンの筆によって描き出されるとされるのが、「塵埃と腐敗の世界（Staub- und Moderwelten）」⁵である。ユンガーは二度の世界大戦に従軍したが、彼がこのクビーンに対する上記の評価を自身の日記に書き綴ったのは、1943年、第二次世界大戦でパリ参謀本部に勤務していたときのことである。トラークル、カフカに並べて、小説としては1909年刊行の『もう一つの側（Die andere Seite）』⁶のみをも

ち、しかも必ずしもその作品への評価が、彼の素描作品に比べて高いとは言えない素描家、挿絵画家であるクビーンを、トラークル、カフカに並べるユンガーの評価は、読者に少し奇異な感じを与えるかもしれない⁷。

そうしたクビーンについて、以下に引用するのは、ユンガーが1929年に発表した『もう一つの側』についての評価である。ひとつの世界が没落しゆく時、その前兆として、予言のようにその没落を告げる芸術的天才が訪れる。ユンガーは、クビーンの作品をこの系譜に連なる才能の成果として評価をする。

市民世界の没落——私たち全員が身をもって知っている、それどころか今なおその真っ只中にある没落のことである——もまた、さまざまなタイプの予言者に事欠かない。外的状況が破壊されるときには、より高次の責任を担うあの諸精神のなかへの信仰の崩壊が先行することが避けられない。そういうわけで私たちはすでに、リアリズム、自然主義、唯物論が提示する一本調子の光景のなかで、そういったものでは簡単に満足することのない天賦の才の持ち主が、次々に出現するのを目にするのだ。⁸

ユンガーとの関係を考えるにあたって他の画家と比べてクビーンが際立つのは、両者の間のアプローチが、ややもするとユンガーの側からの一方通行に見えることだ。それには、ユンガーが著作家として出発しようとしていたときにはすでに画家として有名になっていたクビーンの偉大さが影響しているのかもしれない。先行研究においては、クビーンはユンガーの精神形成にとって重要な役割を果たしたことになる⁹。では、クビーンの絵画をユンガーはどのように受容したのか。次項において確認しよう。

3. ユンガーとクビーン（の絵画）との出会い

クビーンとユンガーとの間で直接の交友が開始されたのは1929年であるが、クビーン作品とユンガーとの出会いはそのかなり前、1914年8月にさかのぼる。1914年8月1日の第一次世界大戦開戦に伴う動員令を受けてユンガーは、緊急のギムナージウム修了試験（Notabitur）を受け、大学入学資格を得たのち、志願兵として戦地に向かう。入営直前のユンガーがたまたま本屋のショーウィンドウで目にしたのが、クビーン素描「Der Krieg」であった。

〔クビーン作品の〕最初の思い出は、1914年の8月にさかのぼる。当時、書店のショーウィンドウに、「戦争」というタイトルのついたクビーン素描が陳列されていた。このスケッチは、1903年に出版された画集に収められていたものなので、その時進行していた出来事〔=第一次世界大戦を指すと思われる——引用者注〕に着想を得た作品ではなかった。だから、ほかのどんな時代にとっても、またほかのどの国にとっても重要なメッセージとなり得たのである。¹⁰

これがクビーン作品とユンガーとの最も早い出会いであり、その印象を携えて、ユンガーは第一次世界大戦の前線へ向かったのである。ここでクビーン素描「戦争（Der Krieg）」について描写しておく必要があるだろう。この作品が世に出たのは、長編小説『もう一つの側』刊行の6年前、クビーンがイン河にほど近いツヴィクレットに館を購入し居を構える以前のことである。「戦争」はクビーン最初の画集であるいわゆる『ヴェーバー画集』¹¹に収録された。「戦争」には、対峙する二つの軍勢が描かれている。「二つの軍勢」といっても片方は一人である。豆粒ほどの大きさで槍を上方に向けて寄せ集まった大量の小人たちの軍勢に、いかにも野蛮で

強力な武器でもって襲いかかろうとしているのは巨人である。巨人には特徴が四つある。ローマ風の兜をかぶっていること、全裸であること、足先が象のようになっていること、右手に肉切り包丁のような刃先が付いた棍棒を振りかぶっていること。その武器は、今にも小人の軍勢へ振り下ろされようとしている。

ユンガーは、のち1964年に、ミュンヘンのバイエルン美術アカデミーで開催されたクビーンの個展で講演を行なっている。この講演でユンガーは、「戦争」についての解釈を述べている。ユンガーはこの作品を二つの視点から捉えた。一つは巨人を軍神マルスであるとする解釈、もう一つは巨人が持つ武器が悪夢の象徴であるとするものだ¹²。とくに後者の解釈については、のちに見るザックスやガイヤーによるクビーン解釈がユンガーの場合にも妥当するように思われる。

4. ユンガーからの最初のアプローチ

クビーンとユンガーの交際を考察する際に欠かすことのできない材料が、二人の間で交わされた往復書簡である¹³。「往復」といっても、現在この書簡集に収められている二人の手紙のうち、最初の一通から二通目までには、じつに8年近くの時差がある。一通目は、手紙というよりは、ユンガーからクビーンに献呈されたひとつの詩が書き付けられたものだ。以下、ユンガーの原文と併せて詩を見てみよう。

Zu Kubins Bild: Der Mensch.

Traum, hindurchglüht, wird Vision, Krystall,

Urfrage Sein zu Wahnsinn, Katarakt:

Aufrechter Mensch; geschleudert in das All,

Orkan im Haar, bleich, einsam, nackt.

Ausschnitt endloser Kurve dämmert Welt,
Absturz in Dunkel, transzendenter Schwung,
Aufschrei das Leben, jäh aus Nichts geschnellt,
Ein Rampenlicht zu irrem Zirkussprung.¹⁴

クビーンの絵画「人間」に

夢は脳髄を貫いて増え上がり、幻想となり、結晶する。
存在とは、という根源の間が、狂気となり、奔流と化す。
棒立ちの人間。全の中に投げ出され、
髪の中に嵐が吹き荒れる。青白く、孤独で、赤裸。

無限の曲線の切片が、世界を薄闇で覆う。
暗闇での落下、超越的な曲線、
この人生は無から不意にほとばしり出た叫び。
フットライトが狂気のサーカスの跳躍を照らす。¹⁵

クビーンの素描「人間 (Der Mensch)」に描かれているのは、上方からレールをつたって降下してくる一人の人間である。滑り降りてくるそのスピードにあわせて、白いその髪の毛は逆立ち、後方にたなびいている。肌の色を完全に失ったかに見えるその人間は男性にも女性にも見えるが判別は難しい。人間の足は二つの車輪に挟まれた台座に立っているようにも見えるし、足と車輪は一体化しているように見える。レールはカーブを描いて下方に向かって伸びているのだが先がどこへ続いているかは見えない。ともかく観る者が理解できることは、髪の毛の様子、車輪の具合から、「人

間」が、高速で奈落へむかって降りてゆくのだということだけである。

1902年頃の作であるこの素描をユンガーが初めて見たのがいつであるかは、明らかでない。ユンガーは、第一次世界大戦の戦場から帰還し、処女作『鋼鉄の嵐の中で』を自費出版として1920年に出した翌年の1921年の2月、何の前触れもなく、クビーンにこの詩を送りつけた。ユンガー26歳のときのことである。当時ツヴィクレットに館を構えていた40歳を過ぎたクビーンは、すでに素描家、イラストレーターとして世間にその名を知られていた。ユンガーからクビーンに献呈された詩に対しては、しかし画家の方から反応が返ることはなかった。つぎにアプローチしたのは、再びユンガーからである。クビーンの作品「人間」への献呈詩を送ってから8年の時を経て、ユンガーはクビーンに向けて二通目の手紙を送る。1929年の2月のことである。ユンガーは、かつて自分が「人間」についての詩を贈ったことをクビーンに書き、新たに現在準備中であるクビーン論のために、クビーンの作品を貸してほしい旨願い出るのである。これに対してはクビーンがすぐさま返事を書いた。返事を書くだけにととまらず、ユンガーの申し出に快諾を与え作品入手の手続きについて細かく指示を施す。そして、手紙の結びには、8年前に贈られたあなたからの詩をちゃんと覚えてますよと書き送るのである¹⁶。

ユンガーはクビーンに献呈したこの詩を、「Traum (夢)」という単語で書き始めている。アルフレート・クビーンの作品に夢（とくに悪夢）の痕跡を探る試み、あるいは彼の作品を夢から説明する試みは、この画家の作品の解釈史において、現在まですでに長い歴史をもっている。その歴史は、1912年に遡ることができる。クビーンには、無数に残された素描作品、またエドガー・アラン・ポーやE. T. A. ホフマンの作品への挿絵の他に、わずかの散文が残されている。そのなかでも、1909年刊行の『もう一つの側 (Die andere Seite)』は、クビーンが唯一残した長編小説として、これまで様々な考察の対象となってきた。フロイトの主宰した「人文科学への

精神分析の応用のための雑誌」である『イマーゴ (Imago)』には、その第二号にフロイトの同僚ハンス・ザックスによる『もう一つの側』評が掲載されている¹⁷。ザックスの論考では、フロイトの理論が隆盛を誇った当時を偲ばせる夢判断風の解釈のほか、父殺し、近親姦といったフロイトの理論を根拠とする解釈が全面的に展開される。『もう一つの側』に登場する、中央アジアに「夢の国」を建設したパテラ (Patera) とは、クビーンの厳格な父親 (Vater) の象徴であるとも示唆されている。ザックスによれば、「クビーンはこの作品によって自分の抑圧された激情を昇華させた」¹⁸ (ハンス・ザックス「もう一つの側」)。このザックスの解釈は、的を射たものであるといえるだろう。というのも、筆者の手元にあるクビーン『もう一つの側』初版本の完全復刻版には「父の思い出に」という題辞が掲げられているからだ¹⁹。ザックスならずとも、世界最高の富を有する「夢の国」の主人パテラに、クビーン自身が「世界でもっとも裕福で、世界でもっとも賢い人間」と呼んだ父の姿を読み込み、『もう一つの側』はその父との苦闘の産物であるとする解釈は、クビーンがこの作品に相対する読者の自然なアプローチであるかにも思われる²⁰。では、ユンガーは、このクビーン『もう一つの側』をどのように読んだのであろうか。

5. 『もう一つの側』とユンガー

クビーン唯一の小説『もう一つの側』は、挿絵画家、素描家として名高いクビーンにおいて、それほど高い評価を受けてきたわけではない。しかし『もう一つの側』は、クビーン作品のうちでもこれまで実に多くの解釈の対象となってきた作品である。ユンガーによるクビーン評価を考察する際に見逃してならないと思われることは、クビーン素描や版画に留まらず、小説作品『もう一つの側』がユンガーに及ぼした効果である。ユンガーが、第一次世界大戦が勃発するやただちに志願し、入営の直前にク

ビーンの「戦争」に震撼されたことはすでに述べた。いわば偶然の出来事であったともいえるユンガーとクビーン作品との出会いは、今度は前線に場所を変えて再び生じることになる。従軍した後ユンガーは、前線の書店で『もう一つの側』を購入し、戦闘の合間をぬってこの作品に耽溺した。『もう一つの側』との出会いを、ユンガーは次のように記している。

1916年の秋だった。私は休暇から呼び戻され、カンブレーで夜を明かさねばならなかった。長く、孤独な夜だった。野戦書店はまだ店を開けていたが、品揃えはお粗末だった。私は『もう一つの側』というタイトルの本を手にとった。私は、とくに挿絵が気に入って購入した。その本の読書に熱中し、眠るのも忘れた。〔中略〕当時『もう一つの側』は、私にとっては、危険で幻想的で、不気味でもある遠出を伴うわくわくする冒険だった。しかしこの『もう一つの側』という作品には、それ以上の秘密がある。悪夢の中で見られる、やがておとずれる驚愕と運命の幻想である。そして、現在までのところ、その意味においてこの作品は理解されていないのである。²¹

ここでユンガーは、従来なされてこなかったやり方で『もう一つの側』を読解しようという野心をのぞかせている。クビーン作品を夢との関連に置く解釈は、先に挙げたハンス・ザックスによる『イマーゴ』掲載論文以降も綿々と続けられており、広範なクビーン研究を積み重ねており、ユンガーにおけるクビーン受容についても着目するガイヤーなどにおいても、夢の問題は重要な位置を占めている。

ここまで、ユンガーに影響を及ぼしてきたクビーン作品をいくつか見てきたが、これらに連関をもたせることは果たして可能だろうか。ユンガーがクビーン作品中初めて目にしたクビーン素描「戦争」は、ユンガーによって19世紀市民が、クビーン描く巨人によって蹴散らされることの象徴として受け止められたのだと理解することがまずできよう。さらに、

ユンガーが前線で読みふけた『もう一つの側』は、その19世紀市民の没落が描かれる作品として戦場のユンガーに読まれた。ユンガーは、1929年にクビーンへ宛てて書いた二通目の手紙の中で自分自身が「ほとんど顧みられていない」²²と書いた『もう一つの側』に対して、しかし最大限の賛辞を惜しまない。

この小説は、幻想的なものの領域において、おそらく E.T.A. ホフマン以降、最上の作品である。この種の業績がすべてそうであるように、この小説はある精神的土壌の上で成り立っており、その土壌は、尋常ならざるとか、病的であると言いならわすことが可能である。精神分析に夢中になっている者がこの作品を読むなら、豊富な収穫を得るだろう。提供されるのは、強迫観念、精神的視力障害、幻覚、白昼夢、ヒステリー、不安、混沌、方向感覚の混乱、失神、てんかんの発作などであり、欠けるものがないほどだ。しかしそれらは、問題設定としては下位に属する。むしろ重要なのは、『魔の山』のような作品に先がけて書かれたクビーンのこの作品で、もっとも感受性の高い繊細さを探り当てる能力が、腐敗の緩慢な襲撃を、腐敗が地下で這い回る様子を、腐敗が容赦なく解体してゆく様を、腐敗の戦慄を、腐敗の幻想を、腐敗の裏切るような甘美さを捉えていることなのである。²³

ここで表明されたクビーン『もう一つの側』へのユンガーの評価は、1929年に発表されたものである。この時、クビーンとユンガーはどのような関係にあったのだろうか。

6. ユンガーの政治からの転換にクビーンとの交流が果たした役割

クビーンに2通目の手紙を書きクビーン論に着手した1929年頃のユンガーは、ちょうど、その作家活動における転換点を迎えていた。25年頃から、

様々な雑誌を舞台に政治評論活動を展開してきたユンガーであったが、クビーンの小説『もう一つの側』論を発表した頃から、政治評論の数が減少していく。これを背景とする両者のやり取りからは、クビーンがユンガーに対して及ぼした影響を考察する糸口をつかむことができるのではないだろうか。

まず、ユンガーによる『もう一つの側』論が発表された直後の1929年の4月12日、クビーンは、ユンガーを自分の住むツヴィクレットに招待する手紙を出している。この訪問はしかしこの時は叶わなかった。クビーンの方からのアプローチはさらに続く。クビーンはつぎに、1931年12月にハンブルクで開催されるみずからの個展の開会講演をユンガーに依頼するのである。しかし、ユンガーはこの依頼を引き受けることをしなかった。以下に挙げる、31年9月20日付けの手紙には、ユンガーからクビーンに対する弁解の言葉が述べられている。

オッテ氏は、私がハンブルクのあなたの個展が開始されるにあたっての講演をひょっとして私がやりたいかと尋ねてきました。私は、提案されたような形式のものはふさわしくないと考えています。というのは、私が絵画や素描に関してなにか直接ものを言える人間ではないということもありますが、私の名前が多くの人にとって政治的含みをもっているからです。²⁴

この手紙のなかでユンガーが表明する危惧とはなんであろうか。たしかに、ユンガーとクビーンの間で交わされた書簡のみに限定すれば、そこでは政治的事象への言及は抑制されている。しかし、ユンガーがクビーン『もう一つの側』についての文章を発表した1929年は、当時北ドイツ地域を中心に拡大していた反体制実力闘争「ラントフォルク運動」への支持をユンガーが表明した年であり、クビーンがユンガーへの講演依頼をした31年は、前年に自身が編者となった『戦争と戦士 (Krieg und Kriger)』にユンガ

一がエッセイ『総動員（Die totale Mobilmachung）』を発表し、ヴァルター・ベンヤミンによって「ドイツ・ファシズムの理論」として批判された頃でもある。ユンガーから講演を固辞する手紙を受け取ったクビーンは、これに対してなおもあきらめず、1931年10月10日、再度ユンガーに翻意を促す手紙を送ることとなる。

…最近聞いたのですが、どうか〔講演の依頼を〕お断りになるなどということはなさらず、いま一度考えてみてはくださいませんか。「政治的」なものは、人がそれについていろいろとけちをつけているほど、あなたの場合にはそれほど大きな部分を占めてはいませんよ。こういう場合に大切なのは、心の底から〔絵画を〕深く理解することであって、専門的知識でさえ、二の次といえるのではないでしょうか…²⁵

こうしたクビーンからの再度の懇願にも拘わらず、ユンガーが講演を引き受けることは結局なかった。しかし、展覧会終了直後の31年12月30日、ハンブルクの新聞紙上にてユンガーは、『もう一つの側』論に続く、二本目のクビーン論を発表することになるのである。

7. おわりに

ここまで見てきたクビーンとユンガーの交流は、20年代のナショナルリストイックな政治評論で名を馳せたエルンスト・ユンガーの初期文筆活動から、クビーンとの交際の開始によって、ユンガーの著作活動が新しい時期を迎えるその開始地点を示すものだといえるのではないだろうか。「クビーン作品では社会批判めいたものがただついでに描かれている」²⁶とクビーンの絵を評したのはある美術史家であるが、そのクビーンとの交流が、その著作活動の出発点から政治的風土にまみれて作家活動を行ってきた

若き書き手であるユンガーの、新たなステップを用意したのだといえば言い過ぎになるだろうか。

ドイツ、バーデン＝ヴュルテンベルク州の小村ヴィルフリンゲンに今も残るエルンスト・ユンガーの家の書斎には、クビーンから贈られたリトグラフ「Waldspaziergang（森の散歩道）」が飾られている。欠かすことなく毎日2時間近隣の森へ昆虫採集に出かけたユンガーがクビーンの商品のうちから部屋に掲げたクビーンの商品は、第一次世界大戦従軍前に感銘を受けた「戦争」でも、その作品に感動して詩を書き送った「人間」でもなく、この「森の散歩道」であった。ユンガーの後期における重要作品であり、完全に非政治的となった形姿「森をゆく人（Der Waldgänger）」をユンガーが提出した作品『森のみち（Der Waldgang）』（1952）はこのクビーンの「森の散歩道」からモチーフを得たものであると確証付けるものは今のところない。しかしユンガーが終生自身の書斎に掲げたのが、「戦争」でも「人間」でもなく、この「森の散歩道」であったことは、クビーンからユンガーが手にした道筋を示しているともいえるのではないだろうか。小論において確認できたことは、1914年の偶然の出会いから始まり、とりわけ1929年から31年の間のクビーンとのやり取りが、当時の、またその後のユンガーにおいて、作品形成の大きな糧となっているということのみである。クビーンの商品のインパクトがユンガーの商品においてどのような思想となって結実したかを見るのが今後の課題である。

注

- 1 本稿は、第117回トーマス・マン研究会（2018年12月15日、於・西南学院大学学術研究所）での研究発表（市民階級の没落とその後の世界——アルフレート・クビーンとエルンスト・ユンガーの交流について——）の原稿の一部を元にし、これに加筆したものである。口頭発表の際及び終了後にご指摘、ご意見をお寄せ下さった方々に感謝申し上げます。
- 2 1920年代後半、北ドイツ、シュレスヴィヒ・ホルシュタインを中心とした農民団体による爆弾テロ事件など街頭実力闘争へのコメントをユンガーに求めた左派系雑誌

- 『日記 (Das Tagebuch)』の編集者は、ユンガーの論文「〈ナショナリズム〉とナショナリズム」を掲載した号の論評においてユンガーのことをこう評した。この論文は、ユンガーが、議会主義的方针を選択しようとしているナチ党に対し、あくまでも暴力闘争の側に立つ自らの立場を鮮明にし、ナチ党との路線の違いを際立たせた論文として極めて重要である。
- 3 Volker Katzman: Ernst Jüngers Magischer Realismus. Hildesheim/ New York 1975, S. 24. 引用は、内田賢太郎「月と皮膚——エルンスト・ユンガーの立体的認識における距離の問題」、『研究年報』第34号, 2017年, 2頁より。
 - 4 Ernst Jünger: Das zweite Parisertagebuch. In: Ders.: Sämtliche Werke. Erste Abteilung. Tagebücher III. Bd. 3. Strahlungen II. S. 9-294, hier S. 201. /エルンスト・ユンガー (山本尤訳)『パリ日記』, 月曜社, 2011年, 356頁。
 - 5 Jünger: Ebd.
 - 6 これまでクビーンの小説Die andere Seiteには『裏面』と『対極』という二つの訳語があてられてきた。一方、山下武「クビーンの怖るべき画集」(『Pinus』43号, 1997年)では「もう一つの側」という訳語が生まれている。本稿においては、この山下訳を採用することにした。
 - 7 ユンガーによるクビーンおよびトラークルへの注目はすでに長期にわたる。クビーン『もう一つの側』を論じた文章においてユンガーは、クビーンの商品の特徴である色彩のなさと、トラークルあるいはヴァン・ゴッホにおける色彩の過剰について比較考察をおこなっている。
 - 8 Ernst Jünger: Die andere Seite. In: Ders.: Politische Publizistik 1919-1933. Hrsg. von Sven Olaf Berggötz, Stuttgart: Klett-Cotta 2001, S. 460.
 - 9 たとえばMartusは、ユンガーへのクビーンの影響は「決定的効果」をもったと主張している。Vgl. Steffen Martus: Ernst Jünger. Stuttgart 2001, S. 73.
 - 10 Ernst Jünger: Rückblick. In: Ernst Jünger und Alfred Kubin: Eine Begegnung. 1975, S. 93.
 - 11 Alfred Kubin: Facsimiledrucke nach Kunstblättern. Hrsg. und verlegt Hans von Weber. München: Weber 1903, 1000部発行。
 - 12 Ernst Jünger: Alfred Kubins Werk. Nachwort zum Briefwechsel. In: Ders.: Sämtliche Werke. Bd. 14, S. 20-21.
 - 13 二人の往復書簡は、のちにユンガーのクビーン論を加えて刊行されている。Ernst Jünger und Alfred Kubin: Eine Begegnung. Frankfurt. a.M./Berlin/Wien : Propyläen 1975, S. 7-89.
 - 14 Jünger und Kubin: Eine Begegnung. S. 13.
 - 15 山本尤「エルンスト・ユンガー試論——クビーンとの交友をもとにするひとつの解釈」、『近代のドイツ精神』, 未知谷, 2000年, 381-407頁, ここは388頁。
 - 16 Jünger und Kubin: Eine Begegnung. S. 15-16.

- 17 Hanns Sachs: Die andere Seite. In: Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften. Hrsg. von Sigmund Freud. 1(1912) 2, S. 197–204.
- 18 Sachs: Die andere Seite. S. 199
- 19 Alfred Kubin: Die andere Seite. Ein Phantastischer Roman mit 52 Zeichnungen von Alfred Kubin. Reprintausgabe nach der Erstausgabe von 1909. München: Edition Spangenberg 1990.
- 20 本邦においてはこれと観点を少し異にする研究がある。山本（『ドイツ精神と近代』未知谷，1977年）はこの『冒険心』に加えて、『大理石の断崖上で』や『ヘリオポリス』、『平和』、『森のみち』などといった後年のユンガー作品にクビーンの影響を見出すことになる（とりわけ『大理石』と『ヘリオポリス』）。いまここで名前を挙げたユンガーの作品は、二本が小説、二本はエッセイである。この山本の解釈は、ユンガーへのクビーンの影響を考察する研究史において、ある意味では独特である。『冒険心』から間を挟んで、ユンガーがヒトラーと袂を分かち、ナチ党と距離を置いた時期以降の作品、とくにナチス体制下の「抵抗文学」の一つに数えられることもある『大理石の断崖の上で』、また第二次世界大戦中、参謀本部付きの将校としてパリにあったユンガーが執筆し国防軍の反党分子将校の間で秘密裏に回し読みされた、来たるべきヨーロッパ像を描いたエッセイである『平和』において、クビーンの影響を見出すのは、何を意味するか。この点は今後の考察の課題としたい。
- 21 Jünger: Rückblick. In: Eine Begegnung, S. 95.
- 22 Jünger an Kubin (den 10.2.1929): Eine Begegnung. S. 14.
- 23 Jünger: Rückblick. In: Eine Begegnung, S. 98.
- 24 Jünger an Kubin (den 20. Sep.1931): Eine Begegnung, S.26. 文中に登場する「オットテ氏」とは、ハンブルクのクビーンの個展を取り仕切り、クビーンとユンガーの仲を取りもった人物。二人の書簡にはたびたび登場する。
- 25 Kubin an Jünger (den 27. Okt. 1931): Eine Begegnung, S. 27.
- 26 ヴォルフガング・カイザー（竹内豊治訳）『グロテスクなもの』、法政大学出版局、1968年、243頁。

参考文献

- Andreas Geyer: »Magische Korrespondenzen«. Ernst Jünger und Alfred Kubin. In: Peter Assmann (Hrsg.): *Alfred Kubin und die Phantastik. Ein aktueller Forschungsrundblick* (Schriftenreihe und Materialien Phantastischen Bibliothek 104). Wetzlar 2011, S. 49–77.
- Andreas Geyer: *Alfred Kubin. Träumer auf Lebenszeit*. Wien/Köln/Weimer: Böhlau 1995.
- Andreas Geyer: “Angriffe des Wunderbaren auf die Welt der Tatsachen”. Annäherungen an das Phantastische im Werk von Ernst Jünger. In: FreundLachinger Ruthner (Hrsg.): *Der Demiurg ist ein Zwitter. Alfred Kubin und die deutschsprachige Phantastik*.

München: Wilhelm Fink 1999.

Ernst Jünger und Alfred Kubin: *Eine Begegnung. Acht Abbildungen nach Zeichnungen und Briefen von Ernst Jünger und Alfred Kubin*. 2. Aufl. Frankfurt. a.M./Berlin/Wien: Propyläen 1975.

Ernst Jünger: Die andere Seite. In: Ders.: *Politische Publizistik 1919–1933*. Hrsg. von Sven Olaf Berggötz, Stuttgart: Klett-Cotta 2001, S. 458–465.

Ernst Jünger: Alfred Kubins Werk. Nachwort zum Briefwechsel. In: Ders.: *Sämtliche Werke*. Bd. 14, Stuttgart 1978, S. 20–21.

Ernst Jünger: Die totale Mobilmachung. In: Ders.: *Politische Publizistik 1919–1933*. Hrsg. von Sven Olaf Berggötz, Stuttgart: Klett-Cotta 2001, S. 558–582.

ヴォルフガング・カイザー (竹内豊治訳) 『グロテスクなもの——その絵画と文学における表現』, 法政大学出版局, 1968年。

Helmut Kiesel: *Ernst Jünger*. München: Pantheon 2009.

Alfred Kubin: *Die andere Seite. Ein Phantastischer Roman mit 52 Zeichnungen von Alfred Kubin*. Reprintausgabe nach der Erstausgabe von 1909. München: Edition Spangenberg 1990.

Steffen Martus: *Ernst Jünger*. Stuttgart: Metzler 2001.

種村季弘「失楽園測量地図」, 『海』1971年3月号, 216–228頁。

内田賢太郎「月と皮膚——エルンスト・ユンガーの立体的認識における距離の問題」, 『研究年報』第34号, 慶應義塾大学独文学研究室, 2017年, 1–25頁。

山本尤「エルンスト・ユンガー試論——クビーンとの交友をもとにするひとつの解釈」, 『近代のドイツ精神』, 未知谷, 2000年, 381–407頁。

Hann Sachs: Die andere Seite. In: *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften*. Hrsg. von Sigmund Freud. 1 (1912) 2, S. 197–204.

エルンスト・ユンガー (山本尤訳) 『パリ日記』, 月曜社, 2011年。

山下武「クビーンの怖るべき画集」, 『Pinus』43号, 雄松堂書店, 1997年, 25–35頁。